

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 親鸞聖人の 鳥見



イラスト 中川 学

悪人こそ救われる

高校の授業で『歎異抄』の「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」の言葉を知りました。これが親鸞聖人が説かれた「悪人正機」

あく「悪とは」

「善人だつて往生できる。悪人ならばなおさら、往生できる。」
 最初に聞いたときには本当にビックリしました。「え、逆じゃないの」って。ふつうは善人の方がいいと言われている。それが悪人こそが往生できるというのです。今回と次回はこの「悪

人正機」説についてお話をしたいと思いましたが、今回はまず「悪」そのものについて考えてみたいと思います。

いま教えに行っている関西の大学で、先日、宝塚歌劇のショー『BADDY(バッディ)』の映像を観ました。

宝塚歌劇のショーという、背中に大きな羽根を付けて大階段を降りて来る、そんなものをイメージすると思います。

『BADDY(バッディ)』にも、そのシーンはあるにはあるのですが、しかし普通の宝塚歌劇からイメージされるものとはだいぶ違う、異色のショーなのです。

BADDY

『BADDY(バッディ)』時代は近未来。舞台は「ピースフル・プラネット(平和な惑星)」と呼ばれる平和な地球の首都「タカラヅカ・シティ」です。なぜ「ピースフル・プ

ラネット(平和な惑星)」と呼ばれるかといえば、一〇三年前、この地球を治める女王様によって、地球からあらゆる「悪」が一掃されたからです。悪人たちは、すべて「月」に追放されました。平和な地球に対して、月が悪人の流刑地になったのです。

地球には悪人がいないどころか、いわゆる「悪いこと」はすべて禁止されています。

酒もタバコも禁止。喧嘩も禁止。「戦争」と名のつくものは受験戦争も宗教戦争も禁止です。王様はときどき女王様の目を盗んでタバコを吸おうとしますが、すぐに見とがめられてそれもかなわず。お酒も飲めません。

そんな地球どうですか。女王様の息子である王子様の口癖は「退屈だなく」。王子様は平和な地球に退屈しています。そんなある日、一度は追放された極悪人である「バッディ(BADDY II 悪い奴)」が月から地球

にやって来た！そこからこのショーは始まります。宝塚歌劇にはトップの男役と娘役がいて、このふたりを中心に芝居もショーも作られます。

このショー『BADDY(バッディ)』でのトップスター(男役)の役が、この極悪人「バッディ」なのです。

宝塚歌劇のモットーは「清く、正しく、美しく」です。トップといえどその代名詞のような存在。そんなトップ男役が、啞えタバコでサングラスという姿で極悪人「バッディ」として登場するのです。どこも「清く、正しく」ない(笑)。

そんな極悪人に対抗するのは、地球の平和を守る「グッディ(GODDY II いい人)」捜査官ら。この「グッディ」捜査官がトップ娘役です。こちららもなよなよしたイメージの娘役とは違い、キリつとした警察官です。悪の象徴である「バッディ」が地球に降りて来ると、地球に変化が起き

てしまいます。善人たちも自分の中に眠っていた「悪」に気づき、それに引かれていくことに気づいてしまうのです。そういうときに歌われる歌があります。

「悪いことがしたい
 いい子でいたい」

この歌の歌詞、多くの方が子どもの頃、あるいは若い頃に感じたことではないでしょうか。悪いことに心は引かれる。でも、親や教師の前ではいい子でいたい。歌は続きます。

「頭は混乱
 心はドキドキ」

どうしようか、どうしようかと悩むので、頭は混乱する。しかし、悪いことへの欲求で心はドキドキしています。

そんな風に始まる宝塚のショーですが、男役トップが大階段からタバコを吸いながら出て来たり、羽根の扇がタバコに

変わったりと、通常の宝塚歌劇の作品からすると本当に異色の作品です。

したくないって？

このショーを学生に観せたところ、学生の感想の多くが「悪いことをしたい」というのがよくわからないというのです。驚きました。

「本当に悪いことをしたいって思わないの」と聞くと「思わない」と言います。「高校時代にタバコを吸いたいか、お酒を飲みたいか思ったことない？」と聞くと、「思ったけど親に心配かけるからできない」と言うのです。

いい子ですね。でも、ちよつと心配です。

親に心配をかけるからしない、というのはいまだいい。でも、「思わない」のは変です。だって、最初は「思った」のですから。「思ったけど、できない」↓「だからしない」というのを繰り返しているうちに「したい」という気

持ちもなくしてしまうおそれがあります。

「悪」の話をしているので、別に問題ないです。しよと思つてしまいますが、違う例で考えてみましょう。

たとえば、ある会社に就職した。入る前はやる気にあふれ、将来はこの会社で一番偉い人、社長になりたいと思つていた。でも、いろいろな障害があつてちよつと無理そうだと思つてようになった。

するとそのうちに「社長なんて、最初からなりたくなかつたんだ」と思うようになってしまふ。それだけならばまだいいのですが、「社長になりたい！」という人が入つてくると「お前がなれるわけない」なんて言う。

歌手になりたい、サッカー選手になりたい、学者になりたい、みんなそうです。

特にこれは、子が親からされがちです。私もそうでした。

子どもの頃から「あれをやりたい」とか「ああ、

なりたい」などという「お前には無理だ」と言われ続けました。ですから「能楽師のうがくし」になると

きには親には何も言わず、ある程度、名前が出るようになってから初めて親に言いました。本を書いた時もそうです。

むろん親に悪気はない。よかれと思つて言つていきます。しかし、親は自分の理解範囲の中でしかもの考えられません。そして、子どもに「無理だ」と言つてしまうのです。

知恵の実

おつと話が逸れてしまいましたので、「悪」に戻しましょう。

そもそも「悪」とは何でしょう。

たとえば、誰もが「悪」だと考えるもののひとつに殺人があります。しかし、これも戦争をしているときには、必ずしも

「悪」にはなりません。となると、これは本当

の悪とは言えない。では、「悪」とは何な

のか。そして人はなぜ「悪」をなしてしまうのか。

キリスト教では、すべての人類は「原罪」という罪を背負つて生まれて来るので「悪」をなしてしまうと考えます。

「原罪」というのは、アダムとイブが神にそむいて禁断の木の実を食べた罪のことです。初めの人間はアダムの子孫なので、生まれながら罪を負つていて考えるのです。

この話を見てみましょう。

天地や昼夜を創つた神

様はアダムと「女」というヒトも作り、彼らをエデンの楽園に置きました。ちなみにこの「女」が後に「エバイブ」と命名されます。

神はふたりに、エデンを耕し、守るように命じ、次のように言いました。

「園のすべての木から取つて食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死ん

でしまふ」。

しかし、蛇にそのかされた女（エバ）がそれを食べ、彼女に勧められたアダムも食べてしまいました。すると、ふたりの知恵の目が開き、そして自分たちが裸でいることが恥はづかしくなり、腰を覆う衣類を作りました。

しかし、神は怒り、蛇と人間に呪いをかけます。蛇はそれ以降、神々からも人々からも呪われ、生涯這いまわり、塵ちりを食らうものとなり、女は蛇の頭を砕き、蛇は女のかかとを砕くようになりました。

また、木の実を最初に食べた女には「お前はらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する」と言い、男であるアダムには「お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前は顔に汗を流してパンを得る、土に返るときまで。お前がそこから取られた土に、塵ちりにすぎないお前は塵ちりに返る」

と言いました。

出産の苦しみ、男尊女卑、労働の苦しみ、必ず訪れる「死」は、ここから生まれました。

そして、神はふたりを楽園から追放した、これがアダムとイブの原罪の物語です。

「悪」とはなに？

彼らが犯した罪Ⅱ「悪」とは何なのでしょう。か。食べてはいけないという神の命令に背いたことなのか。あるいは知恵を獲得したことなのか。正直、このどが「原罪」なのかよくわかりません。

しかし、やはりこれが「悪」というものなのかも知れません。まずは神、すなわち法律や偉い人の命令に従わないこと。それが悪。

平和な時には「人を殺してはいけない」という命令。しかし、戦時中は「殺せ」という命令。それに従わない人は「悪」

だと言われてしまふ。

《次号に続きます》